

連載 26 在宅医療奮闘記

平成7年より
在宅を開始した 私の思い出

(医)東西会 千舟町クリニック院長
橋本 満義 (63歳・内科)

人生いろいろ、幸せなればね～。 日本は平和ですよ…？



「先生大変です。宮西町の喫茶店にAさんが籠城しているので、すぐ来てください」と当院事務方から緊急連絡が入りました。Aさんは83歳の女性。認知症のある在宅医療患者さんです。私はその一週間前にかかりつけ医となりましたが、前医お二人の先生の苦勞をまざまざと体感することになったのです。

急いでかけつけてみると、パトカーに警察官、市役所の担当者、地域包括支援センターのケアマネジャーそして当院のスタッフが総出で、物々し

い現場となっていました。それはまるで特殊部隊の様で、その指揮はかかりつけ医の私がとることにしました。

早速中の様子を偵察することに…。Aさんは、カウンターに座り一万円札20枚ほどを振りまき並べていましたが落ち着いている様子。喫茶店から外に出させるため説得しなければなりません。介護抵抗がみられる患者さんなので速やかに保護しなければいけません。もし抵抗され店内のガラスやコップなど破損した場合、すべて私が責任をとるということで作戦を執行することにしました。

そして、なんとか無事に喫茶店から出すことに成功しました。

警察に保護をお願いしたいところではあります。警察に保護をお願いしたいところではあります。警察に保護をお願いしたいところではあります。警察に保護をお願いしたいところではあります。

けでもないのです。しかしこの一週間、夜間にも連絡があり、警察に自宅まで数回送迎されているのです。また、同じことを繰り返すことになるのは目に見えているので他の方法を考えてみました。

市役所、地域包括支援センターを通して精神科にての保護を強力にお願いしてみましたが、社会通念上、内容的には介護上の問題があるためそれは困難なことでした。

仕方なく、その後も昼夜を問わず往診に出かけることとなったのです。Aさんは点滴静注補液や入院を拒否するため脱水症になり、また貧血症の悪化傾向もあり生命の危険がみられるようになりました。そこでAさんと絶縁状態になっている姉を説得し、Aさんには旅行でホテルに泊まるということにして有料老人ホームに入所していた

いただきました。1～2カ月の終末医療看取りでしたが、点滴静注補液などによって食欲も改善し、施設の方々とも親しくなり施設での生活も驚くほどに満足されていました。そして7～8カ月後、急性心(呼吸)不全のため天国へと旅立たれました。

現在では国は、自宅(施設)での生活で、たとえ病気になっても介護・看護・医療のささえによって人生を全うするよう求めています。

しかしながら、縦割りの専門職である状況では、単独で解決するのは困難です。

クオリティ・オブ・ライフやノーマライゼーションを大切にしている時代だからこそ、知恵を出し合い心を込めた接し方が大切でしょう。社会保障の新しいグループである在宅介護医療チームがそのオピニオンリーダーとなるべき時期にきているのかも知れません。

「お医者さんが来てくれる」 質の高い在宅医療・看護・介護 を『千舟町クリニック』は目指しています。



機能強化型・有床 在宅療養支援診療所

(医)東西会 千舟町クリニック

松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788

<http://www.touzaikai.jp/>